

社会科における小中学校の連携

～地域教材を活用した小学校授業実践から見る中学校社会～

M11EP005

窪田昌彦

1 はじめに

中学校学習指導要領が改訂され、年間指導計画の変更が必要になってきている。小学校は、すでに新学習指導要領に対応した教育課程がスタートしており、小学校の学習内容を確認し、中学校での学習につなげ、社会科における小中学校の連携を考えることにした。そこで、教職大学院の授業の中から得られるカリキュラム作成の理論とプロジェクト実習から得られる実践とを参考にしながら小中学校のカリキュラムの連携を考えていきたい。その中でも、今回は特に地域教材を使った授業について考えていくことにした。

2 小学校における地域教材について

(1) 小学校社会科のねらい

小学校学習指導要領の目標は、次のようになっている。

社会生活についての理解を図り，我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て，国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

下線部については、学習指導要領解説の中で、「地域社会や我が国における人々の社会生活の様子や特色について総合的に理解することを指す」と書かれており、「小学校固有のねらい」という記述も見られる。小学校社会科のねらいの中に、地域で生活していく児童たちが地域を知り、地域の様子を考える事によって、日本や世界の社会生活を学ぶ基礎を作っていく事があると思われる。

(2) 小学校3・4年生について

小学校3・4年生の目標の中で、次のものに

注目した。

(2)地域の地理的環境，人々の生活の変化や地域発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし，地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

また、(2)の目標は、内容として6項目に分けられており、その中で、実践した内容にかかわる部分は、次のものになる。

(5)地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。

ア 古くから残るくらしにかかわる道具，それらを使っていた頃のくらしの様子

イ 地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事

ウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例

この中で、ウの項目は今回の授業で取り上げる「朝穂せぎ」を教材化することによって目的が果たせられるのではないかと考えた。

3 「朝穂せぎ」という教材について

(1) 朝穂せぎとは

朝穂せぎは、北杜市須玉町江草付近の塩川から韮崎市穂坂まで続いている用水路である。

北巨摩地域は、八ヶ岳の裾野に広がる地域で川が少ない。そこで、せぎを作ることによって農地を広げることを考えたものである。

現在の朝穂せぎの名は、明治時代になって、浅尾せぎの「浅」を「朝」と読み替え、穂坂せぎの「穂」と結びつけてつけられた名である。また、昭和50年代の改修工事によって北杜市須玉町・明野町や韮崎市穂坂町の456㍊の農地を潤すせぎとなっている。

(2) 教材としての朝穂せぎ

朝穂せぎを地域教材として取り上げるときの要因について考えた。

①地域性

現在でも北杜市須玉町・明野町、韮崎市穂坂地区の農地を潤す用水路となっており、授業を実施する地区の児童にとって関係が深い。

②先人の働きや苦心

小学校学習指導要領にある「先人の働きや苦心を考える」という内容においては、何年もかかってあきらめずに工事を進めたことなどから、この内容を満たすことができる。

③自然環境

水を確保することが難しい地域であり、農業をするため、生活をするために水を引いてくることが必要であった。その水を確保した結果、生活の向上が促されたと考えられる。

④郷土資料館・現地見学

北杜市立郷土資料館の見学によって当時使っていた道具を見学すること、また、せぎの様子についての説明を受けることができる。また、現在でも流れているせぎを見ることができ。

以上の①～④の点から、教材として今回の単元に朝穂せぎを取り上げることが妥当だと考えている。

(3)朝穂せぎを教材化するにあたって

今回の授業では、朝穂せぎを取り上げる事としたが、その内容を児童に伝えることが目的ではなく、朝穂せぎを通して、人々の生活や変化、工夫を考えることにある。そのため、この教材を通して得た知識や考え方を他の教材や、他の地域での出来事に生かすことができなければいけないと考える。

また、このような地域教材は、独自に調査したものを内容に取り込みながら授業をおこなっていると思われる。そのような性格上、特別に取り入れた部分などは、一部の教員だけが実施するものとなり、同学年の学級によっても内容が異なったり、取り扱いについての考え方が違ったりすることがあると考えら

れる。そのため、教材研究を進める段階から、同一の歩調で行っていく事が必要とされ、かつ、同じ指導案での授業も求められると思う。今回の授業にあたっては、郷土資料館、朝穂せぎの下見を実習校の先生方と共におこなった。そして、授業の時に使った資料を次の学年にも引き継ぐことも重要である。以上のように関係する教員が共に研究することにより、地域教材を学校の教育課程の中に定着していくことができるのではないかと考えている。

4 地域教材に着目した点

地域教材に着目した点は、次の3点である。

①取り上げられたものを児童が実際に見たことがある可能性があること。

②授業で取り上げたものを児童自身の目で確認することができること。

③授業で行うことを児童の家庭においても話題にあげることができること。

自分が住んでいる地域を取り上げているので、以上の3点から生活に密着した学習ができると考えている。このことについては、後の考察の部分で、検証していきたい。

5 実践事例

(1)学習計画

「朝穂せぎ」を取り上げた授業は、次の学習計画に基づいて授業を進めた。

朝穂せぎからくらしを考える(7時間)

1	11.14	須玉に住んだ人々 地形、地名の由来から昔の人々について考える
2	11.17	「せぎ」とはなんだろう 徳島せぎの様子から水の大切さを考える
3	11.21	山梨の昔の開発 山梨の昔の開発の場所やその理由を考える
4	11.22	校外学習2 朝穂せぎの見学 平岡勘三郎の墓・天白サイホン・朝穂せぎの終点
5	11.24	谷が水をこえるには 天白沢サイホンを通して、水を運ぶ工夫を考える

6	11.28	朝穂せぎにこめられた願い 農業ができなかった地域に朝穂せぎを作ったことにより生活が変化していくことを考える
7	12.1	朝穂せぎのまとめ 朝穂せぎのビデオを見て、全体像をとらえ、せぎが人々の生活に与えた影響を考える。

(2) 教具の工夫

朝穂せぎを取り上げた授業を行う中で、「水が必要な地域であった」事を考えるために次の模型を用意した。

中学校の地理の授業では、地図帳を使うことが多い。しかし、今回担当する小学校4年生の様子から、平面の地図では土地の起伏などを読み取ることが難しいと感じた。そこで、模型を使って考えることとした。写真の模型を使い、「水がない地域はどこか」ということを児童に質問すると、地図ではあまり発想できなかった児童が「この場所に水がないのでは」という発言が見られ、平面の地図のみで授業を行うよりも有効であると感じられた。

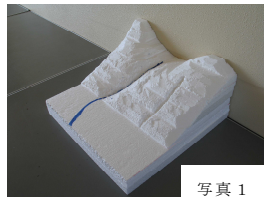


写真1

（3）児童の感想から
授業の中で、児童に考えてほしいことは「朝穂せぎができたことによって生活がどのように変わったか」ということである。そこで、「朝穂せぎを作った人々は何を願って作ったのだろう」という内容で質問をした。その回答の中から、生活の変化に気づいていると思われる記述を書き出してみた。

感想1 「早くせぎができてほしいな。そしたら、田や畑がいっぱい作れて食べ物がいっぱい食える」

感想2 「この村だけじゃなくて、ほかの村にも水が行くように長い朝穂せぎをつくっていたんじゃないかなと思いました」

感想1は、朝穂せぎによって水が潤い、豊かな村ができるであろうということを考えており、朝穂せぎの利用について考えている内

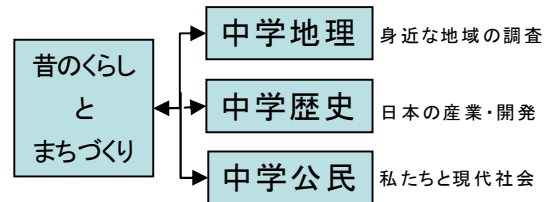
容である。

感想2は、朝穂せぎの長さに注目している内容である。だが、この感想には次への課題への発展性があると考えられる。朝穂せぎの水は、最後には取り入れ口とは見違えるほど水量が少なくなっている。途中の段階で、あちこちの場所で使われているからである。だから、水の見張りのために葦崎市の穂坂に番屋がおかれていた。水を得るための苦労がわかるものである。そのように、朝穂せぎを通して問題にすることはまだまだあると感じている。

6 考察

(1) 小学校と中学校の社会科

「昔の暮らしとまちづくり」について、小中学校のつながりを考えてみた。



この単元は、中学校で取り扱う地理、歴史、公民のそれぞれの分野につながっている。小学校でつけた、地域を考える力を日本全般に、そして世界全般に広げていくものが中学校の学習となる。そのため、断片的な知識の学習だけではその知識ごとにつながりが持たず、「覚えるだけの社会」「つまらない社会」になってしまう。そのため、次のことを念頭に置いて学習を考えていかなければならない。

- a 自ら資料を選択し、活用する力を育てる
- b 地図帳、地形図を利用し、そこから土地の様子を読み取る
- c 新聞・読み物・統計等の資料を活用する
- d 観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめ、発表する

中学校に入る前に、小学校では身近な地域の調査を通して、新聞・年表・紙芝居にまとめるなど、多くの表現方法を学んできている。

また、地域にある問題に気付く目が育成されてきている。中学校では、高校入試や定期試験のために知識偏重の授業になってしまいがちである。小学校の時につけた「まとめる力」「表現する力」を絶やさず、中学校においても続けることが社会について考え、学んでいく姿勢を身に付けることになると考えている。

(2)地域教材に着目した点

4 地域教材に着目した点として3点をあげたが、事前の予想とは変わったところがある。

効果があったのは、③の項目である。普段はあまり授業に関心を示さない児童が、事前に行った「家にある昔の道具をもってこよう」という課題の中では、一番関心を持って取り組んでいた。この課題を通して、児童の違った姿を見ることができた。しかし、いくつかの課題が明らかになった。①②の項目については、事前に予想していたよりも児童の生活圏が狭く、地域にあるものを見たことがない児童が多かったことである。また、校区が広ければ広いほど、小学校の段階では大人の力を借りなければ見に行くことができないと感じた。

(3)中学校での課題

次には、中学校でのこれからの課題についてあげてみる。

a 中学校・地域学習での調査時間の確保

中学校では、小学校のようにまとまって現地見学をする時間がない。これは、社会科で取り扱う内容を調べる時には、すべてに関わってくる。そこで、長期的な休業日を利用することを考える。夏季休業日・冬季休業日の中に学習相談日を設け、定期的に学習を支援する体制を作りたい。また、見学の時には、目的意識、視点を明確にして見学に行く指導が重要である。

b 地図を読み取る力の育成

地図帳、地形図を読み取る力は小学校の段階では弱いと感じている。そこで、地理・歴史・公民にかかわらず、平素から地図を利

用する場面を授業の中に取り入れ、地図から地域の様子を読み取る力を育てたい。

c 問題意識を持つ目の育成

社会科の目標には、「公民的資質の基礎を養う」という言葉が小学校、中学校において共に掲げられている。この言葉は、知識を身に付け、そして考え方を身に付けて社会に貢献できるような力を育てていくものとする。地域の学習を通して得た問題意識を持つ目を日本、世界に向け、自分が何をしたらよいかを考えることが重要となってくる。そのために、学校内外への働きかけも忘れてはいけない。小学校でつけた表現する力、問題意識を持つ目を生かして、自分の地域をより良くしていくための試みを考え、実践していくことが中学校の役割になってくると考える。そして、その地域にとどまらず、ほかの地域にも一般化して考えてく基礎となると思う。

8 おわりに

始めに述べたように私は中学校での実践経験しかない教員である。教職大学院のプロジェクト実習を通して、小学校での児童の様子を見ることができ、社会科の授業だけでなく、日常生活の中での生徒理解につながるものが多くあった。来年度は、中学校での実践をしながら研究を続けていくことになる。小学校で得た知見を基に、小中連携の社会科カリキュラムについて考えていきたい。

9 参考文献

- (1)小学校学習指導要領解説社会編.平成20年.文部科学省
- (2)中学校学習指導要領解説社会編.平成20年.文部科学省
- (3)大森正.石渡延男編.(2009).新版社会・地歴・公民の教育.梓出版社
- (4)朝穂堰土地改良区朝穂堰誌編集委員会編.(1979).朝穂堰誌.朝穂堰土地改良区